太宰府の文化財 405

伝原山本堂跡出土の石塔と原遺跡第27次調査の石組

連歌屋から三条には「原山」・「原八坊」（以下、原山とする）と呼ばれる、古代から中世にかけての山岳寺院が広がっていました。昭和45年、この原山の本堂跡と伝えられる土地で、工事中に地下約1mの場所で五輪塔や層塔などの石塔が数多く発見され、新聞で報道されました。今回は、発見された層塔（**写真1**）を紹介したいと思います。

三重もしくはそれ以上になる層塔は相輪や二層目の笠を失っていますが、各層の彫刻などは残りの良い状態でした。各層には「地蔵菩薩」と「阿弥陀如来」が彫り出され、一番下の初層の仏の両脇には各仏に帰依することを示す「南無地蔵菩薩」、「南無阿弥陀佛」と刻まれています。そして、初層と三層目の笠の軒の下には、角材を表した四角形の彫刻を二段に並べ、軒下の垂木を表現するなど、細かな彫刻が施されています。

このような特徴を持つ層塔は、県内ではほとんど見られず、佐賀県や熊本県で見られるため、筑後より南の地域の影響を受けて造られた物と考えられています。

昭和45年の石塔の発見から47年が経過した平成29年9月から平成30年7月に、層塔が発見された伝原山本堂跡の発掘調査を行いました。本堂と考えられる新旧2棟の礎石建物跡などとともに石組（**写真2**）が出土しました。この石組は、2棟の礎石建物と重複する位置に造られ、礎石建物が建てられていた時代の直後である14世紀代に造られたと考えられます。14世紀代に堂社がなくなった後も、この地が本堂の跡地であり、原山での信仰の中心地であることを示すように、石組の上に層塔を始めとした石塔が建てられていたと考えられます。

昭和45年の新聞記事には、工事の前に発掘調査を望む地元住民の声が強いことや、出土した石塔が住民の手により保存されていたことが書かれ、地元の人の支えによって原山の歴史が伝え残されてきたことが分かります。こうして守り伝えられてきた歴史が、昨年に実施した発掘調査の成果と結びつき、原山の歴史をひも解くことへとつながりました。

文化財課　沖田　正大

伝原山本堂跡位置図
（赤印が伝本堂跡）

写真1
伝原山本堂跡で発見された層塔

写真2　伝原山本堂跡の発掘調査で出土した石組

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報紙は再生紙を利用しています。